

2019年度
地球環境『自然学』講座
第14回

テーマ
“懐かしい未来”を探る

講 師

資源・環境ジャーナリスト

谷口 正次 先生

2019年11月9日
認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

谷口 正次（たにぐち まさつぐ）



1. 経歴

1938 年東京都生まれ。1960 年九州工業大学鉱山工学科卒。同時に鉱山技術者として小野田セメント（現太平洋セメント）入社。1996 年専務取締役。循環型社会を目指し産業廃棄物・一般廃棄物をセメント原・燃料とするなど環境事業を推進。2001 年屋久島電工社長として屋久島を水素社会にする計画を進めるも挫折。1998 年～2008 年国連大学ゼロエミッション・フォーラム産業界代表理事として地球環境問題に取り組む。2006 年～2009 年国際日本文化研究センター共同研究員（テーマ：生命文明の構築）。千葉商科大学政策情報学部非常勤講師（資源・環境論）。2014 年～2016 年京都大学大学院経済学研究科特任教授（自然資本経営論講座）

2. 現職

資源・環境ジャーナリスト（資源・環境戦略設計事務所）
サステナブル・インベスター顧問。ものづくり生命文明機構副理事長。地球システム・倫理学会理事。サステナブル・日本フォーラム理事。星槎大学客員教授。ものづくりの心塾副塾長

3. 著書

入門・資源危機（新評論 2005 年）、メタル・ウオーズ（東洋経済新報社 2008 年）
教養としての資源問題（東洋経済新報社 2011 年）
オーシャン・メタル（東洋経済新報社 2012 年）
自然資本経営のすすめ（東洋経済新報社 2014 年）
経済学が世界を殺す（扶桑社 2017 年）
懐かしい未来（東洋経済新報社 2018 年）他

以上

谷口正次

「懐かしい未来を探る」

ー自然を支配する文明から、自然と共に進化する文明へー

いま、世界では数々の“不都合な真実”が顕在化し、危機的な状況にあると言って過言ではなかろう。それは、環境の危機、資源の危機、そして社会の危機である。

2012年6月に行われた地球サミット（リオ+20）に際して国連は「地球はすでに限界」という報告書を発表した。要約すると、「気候変動と環境破壊は予想以上に加速し、もう後戻りできない。人間は生き方を変えるしか選択肢はない」というものであった。すでに7年過ぎ、深刻さを増す。

このような、危機を生み出す要因は；デカルト、ニュートンなどに象徴される17世紀科学革命にはじまり、18・19世紀の第1次産業革命、続く20世紀の第2次・3次産業革命そして、現代の第4次産業革命にいたる近代西洋合理主義文明（モダニズム）の”進歩“の結果生まれた欲望の資本主義であろう。その”進歩“に裏切られているにも拘らず、進歩信仰がまだ世界を支配している。

しかし、“進歩”著しいモダニズムの社会環境に適応していくために人々は、何時の間にか「過去」と「未来」に対する価値観が変容させられ、思考が逆転してしまい、その結果、現代人は過去と未来の間（はざま）で過去を忘却・棄却して、ひたすら「未来」を志向するようになっていることに気付かされた。

この過去と未来の関係について調べてみると、“「過去」は背後（behind）に過ぎ去り、「未来」は前方（forward）にある”とする現代人の思考に対し、古代ギリシャ人の思考は“「過去」は視界前方（in front）にあり、「未来」は見えない背後（behind）から迫る”というもので、明らかに逆転していることがわかった。そして、世界各地にいまも生きるモダニズムの影響を受けていない人たちの思考も、現代文明人と真逆であることもわかった。近代化以前の日本も含まれる。

「懐かしい未来」を探るということは、現代に支配的な欲望の資本主義と決別して、近代化以前のように、前方に蓄積していく「過去」（歴史）をしっかりと見据えて、背後から迫る「未来」の間（はざま）で現在をよりよく生きることであろう。温故知新あるいはバック・トゥ・ザ・フューチャーである。

過剰消費の現代文明社会の、危ぶまれる持続可能性の中に必死で適応し、やがて適応限界に達し自己解体に向かうことを回避し、「懐かしい未来を求めて」自然と協調して共に進化する人間本来への回帰が必要な時代になったのではなかろうか。

以 上